

序

救急外来や内科で入院患者を診療することは、臨床研修の場における大きな柱であり、数多くの本が出版されています。しかし、内科的疾患を複数もつ高齢者に対し手術が必要になった場合に、具体的に術前評価をどうするのか、術前・術後管理で何をしなければならぬのか、について研修医の先生から「実践的な本が欲しい」という声が多く聞かれ、周術期の入院患者に対する内科的管理のわかりやすい書籍が待たれていました。

そこで本書では、周術期の入院患者管理に必要となる基本的な考え方を示しつつ、具体的な症例を提示しながら、内科的基礎疾患（糖尿病、心不全、虚血性心疾患、呼吸器疾患など）をもつ場合の術前評価、手術が可能かどうかの判断、術後のコントロールで注意すること、術後に起きた合併症（せん妄、心不全、心房細動など）をどう管理するか、抗血小板薬や抗精神病薬を内服中の患者の薬の継続、中止、再開の判断など、「内科的な視点で」解説していく内容を企画しました。

心臓血管外科、移植外科など集中治療室で特殊な管理を必要とするものは、誌面の制約から今回は対象とせず、一般病棟でも行われているコモンな内容を中心としました。さらに、外科系ローテーション中で術前・術後管理を担当する初期研修医、また、外科系より内科コンサルテーションにて術前評価、術後管理を依頼された内科系初期・後期研修医やその他の周術期管理に携わる医療従事者に参考になることを目標としました。

水戸協同病院の医師を中心に、ふだん研修医・若手医師に指導していることや、質問されることなどを思い起こしていただきながら、研修医の実践に直結する内容を記していただきました。読者の皆さんの一助になれば幸いです。

過去には、術前・術後管理は外科の範疇と考えられてきましたが、医学の専門分化、複数の疾患を抱える患者の複雑化、医療の高齢化、外科系の高度の専門医療の発展とともに、チーム医療としての内科への依存はこれからますます高まっていくでしょう。米国でのホスピタリストのように、エビデンスに基づいた内科的管理は、内科医としての重要な役割となっていくと考えられます。

2016年5月

編者を代表して
筑波大学附属病院水戸地域医療教育センター
水戸協同病院 総合診療科
小林裕幸